

プラント状況 (本店レク) 議事メモ

日時: 平成 23 年 7 月 16 日 (土) 11:00~11:30

場所: 東京電力本館 3 階大会議室

先方: 記者約 30 名 (カメラ 3 台)

当方: 原子力・立地本部

原子力設備管理部

広報部

配布資料:

- ・ 福島第一原子力発電所、プラント関連パラメータ (水位・圧力・温度などのデータ)
- ・ 集中廃棄物処理施設 サブドレン水核種分析結果 (7 月 16 日)
- ・ 流量低下への対応

より配付資料に関して説明。

質疑:

Q. 幼稚園や医療法人に対する仮払いを東電が実施していないと一部で報道されているが事実か。

A. 学校法人、医療法人、社会福祉法人への仮払いについては、当社が 3 法人を仮払いの対象から外した事実はない。3 法人への仮払いの必要性については、十分認識しており、現在仮払いの対象範囲の見直しについて検討を進めているところ。

なお中小企業の定義については、中小企業基本法第 2 条及び中小企業団体の組織に関する法律第 5 条に規定する中小企業等が対象となるため、学校法人、医療法人、社会福祉法人については、現時点で仮払いの対象外とさせて頂いている。今後、原子力損害賠償紛争審査会で策定する中間指針により具体的な補償項目や補償の範囲が示されるため、現時点で当社として仮払いを行うかは分かりかねる旨のお知らせをさせて頂いたもので、当社が 3 法人に仮払いをしないと決定したものではない。

Q. 今後台風シーズンとなるが、何か対策は講じているのか。

A. 雨水対策については、屋根や開口部等への養生を実施しているところ。特に屋根については直接雨水が侵入してくるため、タービン建屋の屋根の修理を行っているところ。

Q. 原子力損害賠償紛争審査会が仮払いの指針を決定する前に、東電が仮払いを実施することはしないのか。

A. 仮払いの可否について当社が決定することは難しく、審査会が策定した指針に従い対応させて頂きたい。

Q. 水処理設備の流量低下の要因として配管の圧損増加が挙げられるとのことあるが、圧損増加とは具体的にはどういう意味か。

A. 流量低下の要因としては、配管中にエア溜まりがありそれが水の流れの妨げになっていることと、配管の圧損増加の 2 つが原因ではないかと考えている。後者については、

配管の蛇腹部分や配管腐食防止のための犠牲電極内蔵部分にスラッジが付着し、水の流れの抵抗となっている事が考えられることから、今回、電極を撤去したもの。

Q. それらの流量低下対策を実施すると流量は増えるのか。

A. 昨日、水処理設備を停止した際に連絡配管を交換した結果、流量が $2\text{m}^3/\text{h}$ 増加して $39\text{m}^3/\text{h}$ になったが、 $50\text{m}^3/\text{h}$ には達していない状況。

Q. それらの流量低下の対策は既に実施しており、その結果として流量が $39\text{m}^3/\text{h}$ に増えたということか。

A. その通り。

Q. 1, 4号機使用済燃料プールの循環冷却装置の設置許可が昨日保安院から出たが、今後の作業の段取りはどうなっているのか。

A. 使用済燃料プールの循環冷却について保安院から許可が得られたことから、当初の予定通り順次作業を進めていく。今後設備の据え付け、配管工事を実施し4号機は7月末、1号機は8月上旬に試運転を実施後本格運転に移行したい。

Q. 学校法人、社会福祉法人、医療法人から何件仮払いの申請があり、その3法人については、現時点で一切仮払いをしていないのか。

A. 3法人に対する仮払いは、現時点で未着手。申請件数については確認する。

Q. 水処理設備の流量が低下している原因として、2つの原因以外にどのようなものが考えられるのか。

A. まずは、今回と同様に配管のエア溜まりの箇所の有無やエアが完全に抜けきっているかについて、再確認する必要があると考えている。また、配管の圧損についても、今回交換した部分以外に流れの抵抗になるような箇所がないか調査しているところ。さらに別の原因がないかについても、メーカーと相談しながら調査を進めてまいりたい。

Q. 今回の台風で作業に影響をあたえるものはあるのか。

A. メガフロートについては本日の移送終了した後、ホースの破損防止のため、一旦ホース類を撤去する予定。

Q. 2号機の使用済燃料プールのバルブが建設当初から閉まっていた可能性があるとのことだが、仮にそうだとすると、プールの温度上昇は当初から発生していたのではないか。

A. 冷却塔の中に循環させるだけの水が入っていることから、その水で冷却を続けていたが、水を使い果たした事により温度が上昇しているのではないかと考えているが、いつからバルブが閉まっていたかは明確になっておらず、あくまでひとつの可能性である。

Q. 先日の会見で、8月の水処理設備の稼働率について90%を目指すと説明しているが、流量低下の原因は上記2つ以外に推定できていないのか。推定できていないのであれば目標達成できないのではないか。

A. 原因は究明できていないが、8月まで10日間以上あるのでその間に対応していきたい。

Q. 稼働率90%とはサリーの運用も含めての数字か。

A. サリーも含めて稼働率90%という考え方はあると思っている。

Q. 今回の台風への対策としてどのような対策を講じているのか。

A. 風対策としては、屋外に設置している仮設備の点検と固縛作業を実施していき、メガフロート関係はホース破損防止のためホースの切り離しを実施する予定。

また、雨対策については、建屋のシャッターや扉の周りに土嚢を積み雨水の流入を防ぐことと、タービン建屋の屋根に一部穴があいている箇所があることから仮の屋根を設置する予定。ただし1, 3, 4号機原子炉建屋上部からの雨水の流入はやむを得ないと考えている。

Q. タービン建屋の仮の屋根は既に設置したのか。

A. 3号機タービン建屋については、間もなく仮の屋根が設置される予定。

Q. シャッターや扉付近に設置する土のうは台風が接近した際に積みあげるのか。

A. 人が出入りしない箇所については、前回の台風以降積んだままの状態である。

Q. 本日、水処理装置で予定されている流量低減対策作業は何かあるか。

A. 本日は4塔のベッセル交換を予定しているが、流量低減対策等の作業予定はなく、現時点で原因と対策を検討している段階である。今後、流量低減対策のために計画的に水処理装置を停止する可能性はあるが、具体的な予定は決まっていない。

Q. 2号機と3号機の格納容器の圧力が上がっているが、計測方法を変えたということか。どちらが現実に近いのか。

A. 窒素ガスの注入に関して、格納容器圧力計の信頼性評価を実施する旨を14日にお知らせさせていただいているが、2号機と3号機の格納容器の圧力計は校正できていない状態である。今回、窒素封入ラインを使用して、窒素封入の際の圧力計の指示や、圧力計から格納容器までの圧力損失を評価することにより格納容器の圧力を推定して評価したもの。

15日17時時点で、2号機の窒素封入圧力の指示値はゲージ圧で27.5kPaに対して、格納容器圧力損失はゲージ圧で2.8kPaであるため、格納容器圧力はゲージ圧で24.7kPaと評価している。

なお、本設の監視用圧力計器はマイナス91.2kPaで、本設の安全保護系用圧力計器はゲージ圧で26.1kPaなので、これまで使用していた監視用圧力計器より安全保護系用圧力計器の指示値の方が信頼性があると判断して、大気圧を足し込んだ127kPaとして圧力計の指示値を変更させていただいた。

3号機は、15日17時時点で、窒素封入圧力計はゲージ圧で9kPa、格納容器圧力損失はゲージ圧で9.7kPaであるため、格納容器圧力はゲージ圧でマイナス0.7kPaと見ている。本設の監視用圧力計器の指示値はゲージ圧でマイナス1.7kPa、本設の安全保護系用圧力計器のゲージ圧は0.3kPaと比較すると、安全保護系用圧力計器の

方が信頼性があるため採用している。

Q. 今後はどの計器の数値を公表するのか。

A. 窒素封入系で確からしいと判断している安全保護系用圧力計器の指示値を公表したいと考えている。

Q. 2号機と3号機の格納容器は大気圧と比べてどの程度高いのか。

A. 2号機は大気圧から比べると27kPa程度高く、3号機はほぼ大気圧と同じ状態である。

以上

情報共有 5枚 (非管理メモ)

宮部班, NISA班 ← プラス対応チーム

プラント状況 (本店レク) 議事メモ

日時：平成 23 年 7 月 16 日 (土) 18:00~18:55
 場所：東京電力本館 3 階大会議室
 先方：記者約 30 名 (カメラ 3 台)
 当方：原子力・立地本部 [REDACTED]
 原子力設備管理部 [REDACTED]
 原子力運営管理部 [REDACTED]
 広報部 [REDACTED]

配布資料：

- ・ 福島第一原子力発電所の状況
- ・ 福島第一原子力発電所敷地内における空気中の放射性物質の核種分析結果について (第百十三報)
- ・ 福島第一原子力発電所付近の海水からの放射性物質の検出について (第百十五報)
- ・ 福島第一原子力発電所取水口付近で採取した海水中に含まれ放射性物質の核種分析の結果について (7 月 15 日採取分)
- ・ 福島第一原子力発電所タービン建屋付近のサブドレンからの放射性物質の検出について
- ・ 福島第一原子力発電所 プラント関連パラメータ (水位・圧力・温度などのデータ)
- ・ 福島第一原子力発電所 2号機原子炉建屋 Quince 入域動画

質疑

- Q. 細野大臣が地下の遮水壁の工事を前倒しで行っていきと発言をしたが、工程表の中ではステップ 2 で検討し、中長期的に工事をしていく予定だったと思うが、現段階の認識はどうか。また、着工と建設の目処、また国との費用分担についても教えていただきたい。
- A. 地下の遮水壁については、環境への放射性物質の放出のリスクを小さくするという観点から、現在、基本設計を進めている段階。リスクとして認識しているので、なるべく早く工事に取りかかりたいと考えている。まだ基本設計を検討している段階であるので、費用、建設の目処についても公表出来る段階ではない。
- Q. 地下の遮水壁については、基本設計を検討している段階ということは、6月に公表した工程表から大きな変更はないということか。
- A. 地下の遮水壁について、今のところ6月17日に公表した工程表から大きな変更はない。
- Q. 原子炉建屋からの放出量の調査の進捗状況は。また、原子炉建屋の上部の放射性物質のサンプリングデータと発電所敷地周辺のサンプリングデータをどのように組み合わせ外部への放出量を把握していくのか、詳しく教えていただきたい。
- A. 周辺地域の避難されている方々が、帰宅されるにあたって、放射性物質の放出量できるだけ小さくしたいと考えており、そのためにも、原子炉建屋からどれくらい放射性物質が放出されているかをしっかりと評価する必要がある。評価の方法の一つとして、

原子炉建屋の上部へコンクリートポンプ車、THawkを使用してサンプリングをしていきたいと考えている。また、現在、敷地周辺の空気中のダストサンプリングの値は変化がなく、既に降り積もっているダストが捲き上がっているか、地面のダストの影響を直接受けている結果ではないかと考えている。そのため、敷地の周辺でサンプリング点を増やし、降り積もっている放射性物質の量がどれくらいかを評価して、原子炉建屋からの放射性物質の放出量を評価したいと考えている。

Q. ダストのサンプリング地点を増やしている理由としては、原子炉建屋からの放出量が小さいことを把握するためということか。

A. 原子炉建屋からの放出量は、ごく微量ではないかということの評価したいと考えている。サンプリングと合わせて、原子炉の中がどのような状況で、どれくらいの放射性物質が出るのか解析し、評価していきたいと考えている。

Q. 原子炉建屋からの放射性物質の放出量の結果は、いつ頃公表できるのか。

A. 概算の評価結果についてはまもなく公表できると思う。建屋上部のサンプリング結果と敷地周辺のサンプリング結果と合わせた評価についてはもう少し時間がかかると思う。

Q. 原子炉建屋からの放射性物質の放出量を把握するための、原子炉の中の評価については、どのような方法を検討しているのか。

A. 圧力容器の温度、圧力容器の中の放射性物質の量、また格納容器の中からどれくらい放射性物質が出ているのかを解析し、評価していきたい。

Q. 格納容器の中から、どれくらいの放射性物質が出ているのか数字で分かるのか。

A. 評価結果の中で、解析としてどれくらいの放射性物質が出ているのか分かると思う。その結果が、原子炉建屋上部の放出量と合うのか評価していく。

Q. 原子炉建屋の外に出ている放射性物質の量は、原子炉建屋の各フロアからと、圧力容器からの量が、合わさった量という理解で良いか。

A. その理解で良い。今回、クインスで原子炉建屋のフロアのダストを測定しているが、そういったデータを積み重ねていき、評価してまいりたい。

Q. 映像について。中央のやや上に入っている数字は線量なのか。

A. ご指摘の画像上部中央の数字は線量。また、同じく赤字は走行した総時間。ただし、途中で1回リセットしている。

Q. 汚染水処理施設の調査結果は何か出てきているのか。

A. 本日はフラッシングを終え、39m³程度で再起動している。汚染水処理は重要なミッションであり、停止時間を長くしたくないことから、流量低下を招く原因をまず机上で考え、フラッシングのタイミング、および計画的な停止などを捉えて、確認試験を実施したいと考えている。

Q. 発電所敷地内の状況を確認するという意味では、アルファ核種の追加サンプリング

を行うことはないのか。

A. ヨウ素、セシウム、プルトニウムの主要3核種でほぼ確認できると考えている。

Q. 所内のどこに放射性物質がたくさん降り積もっているかわかった方がいいのではないか。

A. 敷地内では全面マスクで作業をしており、特別様々な箇所を調べる必要はないと考えている。また、これまでに測定した結果、プルトニウム等は自然界と同じである。

Q. 遮水壁の関係では、ボーリングを行うのか。

A. 現在計画はないが、実際遮水壁の基本設計を進めるにあたって、ボーリングが必要ということであれば行うこともあるかと思う。

Q. 今すぐ遮水壁を設置しないということは、漏れていないという認識か。

A. その通り。

Q. 統合本部における共通認識でもあり、東京電力側も地下水に若干漏れていると考えているとのことだったが。

A. リスクとしてはあることを認識しており、遮水壁を検討しているもの。

Q. 地下水のマップは公表しないのか。また、地下水の流速、流量は。

A. 5/17に地下水のマップを公表している。また、流速は1日に数センチレベルと認識している。流量は把握していない。

Q. 映像の右上、バッテリーの下は何を写しているのか。

A. 温度が記載されている。

Q. 映像でいえほどのあたりが一番高かったと言えるのか。

A. 映像では何とも言えないが、実際の線量はおおむね1階で10~27mSv/h、2階で10~50mSv/h、3階北西階段前は12mSv/h。

Q. クインスを今後使う予定はないのか。

A. 特段決まっていない。ダストサンプリング、2号機では水位計の設置を再トライするなどが考えられる。

Q. 台風対策の進捗は。

A. 風対策については、屋外の仮設の設備については点検・捕縛等を行っていく。また、メガフロートについては、本日の移送後ホースを切り離した。雨対策については、開口部に土嚢を設置する、タービン建屋の屋根の工事については継続的に実施している。

Q. 遮水壁の工事はいつの予定なのか。

A. 基本設計を進めているところであり、いつから始まるかは未定。

Q. SFプールからの使用済燃料の取り出しは3年程度とのことだが、事実関係はどう

なのか。

A. 19日の道筋の見直しにおいて少し紹介できるかと思う。

Q. なぜ、この映像を選んだのか。

A. クインスの走行性を重点的に紹介させていただいたもの。

Q. 78分の映像全てを公開する予定はないのか。

A. 核物質防護上問題のあるところを除いて公開することは可能だと思う。

Q. 音声は取っていないのか。音から何かわかったことはないのか。

A. 音声はカットしたと思う。クインスにマイクがあったかどうかは確認する。

Q. 台風対策。2号機原子炉建屋には小さな穴は開いていないのか。

A. Tホークや航空写真により、原子炉建屋そのものに外傷はないことは確認している。ただし、ブローアウトパネルが開いており、そこから水が入る可能性はある。

Q. 3号機への窒素封入の件。格納容器の圧力が上がっていないとのことだが、どのような状況と考えているのか。

A. 窒素注入側の圧力、流量については定格がでている。従って、格納容器のリークタイト性が悪く、中の空気を押し出している状態。

Q. 映像を見て、気づくところがあれば教えてほしい。

A. 地震等で壊れている様子はない。一部、赤茶色のシミがあり、鉄さびを含む茶色水が溜まっていた可能性がある。

Q. 今日の熱中症の状況とこれまでの累計は。

A. 本日は発生していない。福島第一原子力発電所で作業をされた方の熱中症、熱中症の疑いのある方の累計は31人。Jビレッジ分は入っていない。

Q. 放射性物質の拡散の心配はないのか。

A. 格納容器の中に放射性物質があまりなく、環境に影響を与えるようなものではないと認識。

Q. 工程表を出して節目の3ヶ月となったが、ステップ2に向けてコメントは。

A. 私の印象としては、4月17日に工程表を出させていただいたが、ステップ1については大きな課題を残すことはなく取り組めてきたのではないかと思っている。水処理システムについても稼働率が70%であり、順調に処理を進めてきている。ステップ2については、避難されている方のご帰宅が最大のテーマであり、引き続きしっかりと取り組んで参りたい。

Q. 余震、津波等に対し、多重性の面からどのように考えているのか。

A. 4月7日に大きな余震があったことは大きな教訓となったと考えている。現状、仮の設備が多く、これまではスピードを大切にしてきたところもある。ステップ2では非

難されている方のご帰宅に向けて設備の更なる信頼性の向上に努めて参りたい。

Q. ステップ1で得た次への教訓は。

A. これまでにない設備にチャレンジしないといけない中、以前ご指摘いただいた、設計・運用方のコミュニケーションを良くしていくことはこのようなプロジェクトにおいては重要ではないかと考えている。

Q. 冷温停止の定義は決まったのか。

A. 簡単に定義できるものではないが、19日の道筋の発表においては改めてお示ししてまいりたい。数字までは示せないかもしれないが、冷温停止で何を實現するのかについてはお話できるのではないかと考えている。

Q. 6号機の仮設タンクの水位は。

A. メガフロートに既に3,400トン送り込んでおり、タンク容量としては3,000～5,000トン程度の余裕があるかと思う。

Q. 格納容器の冠水の目処はどうなっているのか。

A. 格納容器の止水工事と冠水につきましては、5/17に方針変更をしている。冷温停止には直接関係しないと認識。

Q. どのくらいの注水をする原子炉水位は上がると考えているのか。

A. タービン建屋のたまり水の処理に目処が立った際には、注水量を増加させ、原子炉を冷やしてまいりたい。

Q. 福井の大飯のトラブル箇所はPWR独特の設備なのか。

A. BWRにはない。

Q. 仮払いの件。仮払いを拒否した件数は。

A. 仮払いを拒否したというわけではなく、対応する方向で検討していたが、指針がはっきりしていなかったもの。医療法人、社会福祉法人、学校法人を対象から外さず、今月中に受付を行いたい。なお、仮払いの請求をいただいた医療法人、社会福祉法人、学校法人の件数はおよそ30件。ただし、問い合わせをいただいた際に対象範囲等をご説明したことにより、ご請求頂かなかった法人の方もいらっしゃるかと考えており、正確な数については不明。

以上